

『鮮烈な求愛』

著：伊郷ルウ

ill：南田チュン

「竣ちゃん、どのへんで降りるか言ってくれよ」

春日井の声に我に返った菊川は、雨に濡れた窓の外へと視線を向けた。

目に入ってきたのは雨に煙った景色だったが、それは見慣れたもので、すぐそこに自宅マンションが見えた。

「すみません、その角で停めてください」

前方に向き直った菊川が先を指し示すと、タクシーの運転手は軽くなずきブレーキを踏んだ。

「ん？ このあたりなのか？」

軽く揺れて停まった車の中から、春日井が驚きの顔で前方に目を凝らした。

「ええ、あのマンションです」

「なんだ本当に近くだったんだな。ここからならウチまでいくらもないから、俺も一緒に降りるよ」

菊川の足を軽く叩いた春日井の声は、どこか嬉しそうな響きを含んでいた。

まさか同じ場所で降りるとは思っていなかっただけに、菊川は驚きも露わな顔で見えていたが、春日井は運転手に代金を支払うと、促すようにさらに足を叩いてきた。

先にタクシーから降りて傘を開いた菊川は、車から離れて春日井が出てくるのを待った。

「どうぞ」

続けて降りてきた春日井に差している傘を翳(かざ)すと、彼が頭を低くして入ってきた。

ドアを閉めたタクシーが音を立てて走り去り、そのテールライトが遠くに消えると、マンションや豪邸が建ち並ぶ閑静な住宅街に、夜の静けさが舞い戻る。

深夜の住宅街は車の往来もなく、歩く人の姿もない。道に佇(たたず)む相合い傘の二人の姿が、街灯の明かりにぼんやりと浮かび上がっていた。

目と鼻の先に自分の暮らすマンションがある菊川は、ここで別れるのが名残惜しいような気がしつつも、春日井と向かい合った。

モデルの菊川はかなりの長身だが、さすがに相手が春日井では見上げざるを得ない。わずかにあごを上げて真っ直ぐに彼を見つめる。

春日井の手に傘はあるが、彼はそれを使おうとしない。菊川が差しているのは男性用の傘だが、大柄な男が二人で使うには小さすぎる。

傘の中で遠慮がちに身体を引いている春日井の肩は、おのずとはみ出して雨に濡れていたが、彼はそれにかまうことなく見上げてきた菊川を黙って見返した。

「今日は本当にいろいろとありがとうございました」

「よければ、また今度、飲みに行かないか？」

「ありがとうございます。時間の都合がつけば、いつでもご一緒させていただきます」

「なんか、竣ちゃん的笑顔はたままないな……」

にこやかに答えた菊川を見て春日井は嬉しそうに目を細めたが、ため息交じりにつぶやいたかと思うと、困ったように視線を落としてしまった。

誘いを快く受けた菊川としては、春日井の妙な反応が気にかかる。いったいどうしたのだろうかと、怪訝に思いながらも見上げていると、不意に彼の視線が戻ってきた。

「春日井さん？」

わずかに首を傾げた菊川のあごを掴んだ春日井が、さらに顔を大きく上向かせた。

いきなりすることに驚いた菊川がただただ目を丸くしていると、ひとしきり瞳を見つめた春日井の顔が迫ってきた。

菊川がなにとする間もなく唇を塞(ふさ)いだ春日井は、傘を持ったままの相手の腰を力任せに抱き寄せた。

驚きのあまりの身体を硬直させた菊川は、身動きひとつできないまま、春日井の唇を受け止めている。

あごを掴まれ、腰を抱き留められてはいるが、どちらも振り払うことは可能だ。それでも、突然のキスは驚きが大きすぎ、菊川の思考を麻痺させていた。

春日井の唇は優しく重ねられたが、すぐにそれは情熱的で濃厚なキスに変わり、菊川を混乱させていく。

頭の中が真っ白になっているにもかかわらず、口の中で蠢(うごめ)く舌先や、押しつけられた唇の感触だけが妙に鮮明で、傘を打つ雨の音もはっきりと耳に届いていた。

「んんっ」

気が遠くなるほど長く感じられたキスから解放された菊川は、大きな目をこれ以上は無理というほどに見開き、呆然とした顔つきで春日井を見上げた。

長いキスで濡れた春日井の唇は妖しい光を放ち、真っ直ぐに見下ろす瞳には困惑と動揺の入り交じった菊川の顔が映っている。

「お近づきの印だ」

「あの……」

「楽しい夜だったよ、じゃまた」

悪びれたふうもなく笑顔で明るい声を向けた春日井は、手にしていた傘を開くと振り返ることなく先を歩き始めた。

「春日井さん……」

遠ざかっていく春日井の後ろ姿を見つめる菊川は、なにが起きたのかわからないといった顔つきで立ち竦んでいる。

先程まで肩を濡らすていどだった雨の勢いがにわかに強くなり、傘やアスファルトを打つ雨音が大きくなり始めた。

視界がぼやけていく中で、菊川はしばらく春日井の姿を目で追っていたが、撥ね返る雨に濡れた足元が冷たくなりだすとようやく我に返った。

「お近づきの印って……」

小さく頭を振った菊川は、そっと唇に指先を押し当てた。そこにはまだ春日井の唇の感触が生々しく残っている。

同性からいきなりキスをされた場合、多くの人は嫌悪感を覚えるが、菊川はそうではなかった。

物心がついたころから恋愛対象は同性に限られていて、もちろん、今もその性的嗜好は変わっていない。

とはいえ、少年時代に憧れを抱いただけであって、会ったのも話をしたのも今日が初めての春日井に対して恋心を抱いたことは一度もなかった。

初対面の男に突然、「お近づきの印」にキスをするなど、よほど軟派で手が早いとか常軌を逸しているといきようがない。

「……ったく、おかしな人だな」

春日井に対して硬派な印象を持っていただけに、唐突にキスをして陽気に帰っていた彼にそれを覆された気分の菊川は、呆れ気味の笑い声をもらしていた。

本文 p29～35 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>